



<残された課題>

「安全」を守るから、「尊厳」を守るへ

「**尊厳**福祉」の概要



木原孝久

住民流福祉総合研究所

私どもは長い間、「住民流」というものを追求してきた。住民には住民なりの福祉の流儀があるらしいと睨んで、その正体を探ってきた。最近になって、おぼろげながらその全体像が見えてきた。

(1)人間はもっと尊厳を主張していいはずだ

一言でいえば、存在していたのは住民流というよりも、人間流とでも言うべきものだった。一口に人間と言っても、ただ集団としての人間もいれば、かけがえのない自らの尊厳を主張する人間もいる。「集団としての人間」に対する福祉サービスなら、今すでに行われている。

しかし「尊厳を主張する人間」を、私たちは今までイメージしたことはあるだろうか。福祉を考える時に、自分たちをそんなに尊い存在だと考えていただろうか。今の福祉の落とし穴は、自分たち人間を貶めていたことかもしれない。災害が起きれば、小学校の体育館で、コロナ感染に怯えながら、眠れない一夜を過ごすことも厭わない。寝たきりになれば、老人ホームで一生を過ごせと言われても、諦めてこれに従う。

(2)文明の非人間的な側面に目を向けよう

こんな安易な姿勢になったのも、もしかしたら文明の仕業かもしれない。文明は、心地よい社会を求めて、それに都合の良いあり方を人間に強いてきた。何事も効率の良いのがいい、だから対象を分別しよう、対象ごとにまとめてしまおう、とにかく手っ取り早く解決できるやり方がいい、すぐに効くものもいい、というふうに。社会のあらゆる営みはこのあり方で統一されている。

ところがその効率主義が、福祉や教育といった、人間を扱う場でも同じように適用されている。今だに災害というと小学校が使われるのは、人をたくさん集めて、効率よくサービスをするのに都合がいいからだだろう。おかしいことに私たちは、そうした効率よく人間を処理するようなあり方を甘んじて受け入れている。

人間はもっと自分自身への尊厳を主張していいはずなのだ。ところが、文明という大きな流れに逆らうこともなく、粗雑な福祉を特に抵抗することもなく受け入れている。その結果、自身も福祉の仕事で、また活動で、何も疑問を持たずに相手にそのような福祉を押しつけてしまう。ここが問題だ。

僻地と言われる町でフィールドワークを実施した際、最近起きた風水害で人々はどこへ避難したのかと聞いてみたら、驚くべし、町の中心部にあるホテルと旅館が予約客ですぐ満員になってしまったという。

今までは避難と言えば小学校だったのが、最近国や自治体もホテルや旅館を借り上げる。1つの事例がテレビで紹介されたら、瞬く間にこのやり方が全国に広がった。そのような事例を見ると、質も値段も高いホテルが早くから埋まっていたりして、コロナだけが理由ではないことが分かる。誰もそのことは言わないが、やはり人間は「尊厳を守れる避難」を求めている。

(3)いずれ「尊厳」をめざすという志を持っていた？

あるとき福祉関連の法律を見ていて、冒頭に「尊厳」という言葉が使われているのに気が付いた。社会福祉法しかり、児童福祉法しかり、介護保険法しかり、児童権利宣言しかり。

福祉に携わる人たちは初めから、尊厳というものを、自分たちが目指す目標として密かに心の中に持っていたということではないか。しかしそれはかなり実現が難しいので、表立っては言っていなかった。でも、一応法律の中にはそのことを入れ込んでおこうと思ったのか…

(4)福祉は本当は、当事者の尊厳を傷つけている？

では関係者はなぜ尊厳という言葉にこだわったのか。今の福祉が実は、当事者の尊厳を傷つけていることを、薄々は知っているからではないか。しかし根本のところから自分たちの姿勢を改めないことには、尊厳を回復させる福祉はつくれない。だから、とりあえず「懸案」にしていたとも考えられる。

そろそろ、この懸案にチャレンジしてみる時期に来たのではないか。でないと、事態は少しも改善されない。

(5)文化としての福祉と文明としての福祉の闘い

福祉の世界で展開されているのは、一言で言えば、文明と文化の戦いである。現行の福祉は、まさに文明そのもの。文明とは、私たちにとって、心地よくて便利な社会をつくるための手段と言っていい。科学技術も、その便利な社会をつくるために奉仕している。今の一般的な福祉の営

みも、その文明の一部と目されている。介護などの世話を必要とする要援護者は、施設等に集めて関われば効率がいいのは確かだ。

これでわかるのは、文明が追求する「心地よさ」は、当事者ではなく、担い手の方に保障されるものだということだ。文明は担い手が効率よく、簡便にできるあり方を追求し、当事者にはそれを甘んじて受けることを要求している。

しかし一方で、「文化」としての福祉もあるのだ。ライフスタイルということであり、人間の生き方の中に福祉が織り込まれているということだ。文明のように、わざわざ一般社会から福祉なるものを抜き出して、いかにもそれらしく人々の困りごとに対応するのではなく、普段の生き方の中でさりげなく福祉をやってしまう。

(6)文明の手法を続ける限り尊厳は回復できない

福祉関係者は、今の粗雑な福祉が、まさしく文明としての福祉であること、文明的手法に従っている結果だという点に、まだ気づいていないのだ。そこが最も重要な点である。だからこのやり方を続ける限り、当事者の尊厳を守ることはできないということも理解されていないだろう。それどころか、今の福祉こそがあるべき姿だと思い込んでいる人も少なくない。

したがって、今更これをライフスタイル型に変えようとしても、それは難しいだろう。文明の流れは凄まじいもので、誰もこれに抵抗することはできない。

(7)ライフスタイルとしての福祉を実現する道の険しさ

文明から文化としての福祉に移行するには、きわめて険しい道が待っている。文明としての福祉なら、ごく簡単に言えば、ただ安全を守ればいだけかもしれない。しかしこれからは、その人の尊厳を守るのである。これで福祉サービスの要件ががらりと変わってくる。

たとえば、①福祉サービスのレベルは一般の住民よりも120%高く、を要求される。②一般の生活の中に福祉が紛れ込むようにする。表面では福祉が行われていることがわからないように。こうするには、かなりのテクニックが要る。③サービスを受ける当事者が担い手になるようにする。これも難しい。④個々の当事者について、その人特有の能力を掘り起こす。⑤お互いが担い手になったり受け手になったりする。

いずれの要件も、今までの福祉とは根本的に異なっている。きわめて奥深いのである。そしてこれこそが当事者の尊厳を守る福祉なのだ。

先日テレビでこんな映像を見た。30歳を過ぎても子どもができない夫婦が、それでもと頑張り続けたが、結局子どもは授からない。2人で話し合い、苦渋の選択に踏み切った。子どもはもうあきらめよう、である。しかしこれだけでは、2人の苦しみは消えない。奥さんはその後、何をしたか。不妊症のカウンセラーになったのである。これこそが本人の尊厳を守る解決策だろう。先ほどの③に該当する。

(8) 効率のよい福祉の追究と尊厳の保持は相容れない

もし福祉の指標を「尊厳の保持」とすれば、それを理解できるのは誰だろうか。これは当事者にしか分からないかもしれない。なぜ福祉関係者ではないのか。彼らは、そうと意識していないものの、事実上、福祉も文明の営みの一環ととらえている。だから常に効率や簡便さを求めている。それは当然、担い手の側から福祉を考えるということでもあるのだ。

それが身についている担い手が、「何よりもまず当事者の尊厳を守ってあげなければならない」と考えるだろうか。やはりそれは難しいのではないか。

(9) 尊厳を守る福祉は当事者自身がつくり出すしかない

だから、尊厳を目指す福祉は、それを求めている当事者自身がつくり出すより仕方がないということになる。

と言っても、当事者は要援護者である。その人が自分のための福祉をつくるというのは無茶な話である。しかし理屈ではそうなるのだ。ならば、どうすればいいのか。この答えを見つけ出すのに、大変な苦勞をした。しかもこれが正解とはまだ自信をもっては言えない。

(10) 皆が当事者(の味方)になればいい

答えは、当事者の味方をつくれればいい、ということだ。思い切って、住民をみんな、当事者にしてしまうのだ。社会のすべての人に「当事者意識」を育てていく。当事者意識を持った人で溢れた社会になれば、当事者の味方はそれだけ増える。

私たちの要求水準が上がっていけば、避難のために、もはや小学校に行く気はなくなるのではないか。先ほどの例のように、真っ先にホテルを予約しようとするだろう。そうすると、他の避難者の気持も分かるから、その人たちも同様にホテルを予約できるようにしようとするはずだ。皆が当事者意識になれば、尊厳を守る福祉を実現しようと、自然に思うはずなのだ。

ただ私たちは、「自分は福祉問題を抱えた当事者だ」という自覚を持ちたくない。これをどう克服するのが課題と言え言える。風水害とコロナ禍のおかげで、私たちは小学校に行かねばならない状況に置かれ、慌ててホテルを予約する必要に迫られた。自分も当事者なのだと、改めて悟らされた。不幸中の幸いと言おうか。

いずれ、当事者と言え住民のことだと（限られた一部の人ではなく）、だれもが理解できるようになれば、またそう理解することが正解になれば、その時に確かに福祉は変わるかもしれない。

(11)自分の問題と社会問題の解決を一体的に考える

もし、だれもが当事者の意識になれば、自分の問題解決と仲間の問題解決と社会問題の解決を一体的に考え、取り組むことができるかもしれない。超高齢社会になり、だれもが健康寿命を達成することは難しく、老人ホームも自分の未来の選択肢の1つに近づいてきた。尊厳を失わずにいられる老人ホームを私たち自身も模索し始めるのは間違いない。

(12)ライフスタイル型福祉は、反文明と通じている

一方に文明としての福祉があり、もう一方に文化としての福祉がある。両者は両極端の概念である。しかも今の社会は、文明が事実上支配している。誰もが効率を求めて、対象を分類して集め、その1つ1つに専門的に関わる。それがいいことなのだと、だれもが信じている現代である。ところが、ライフスタイルとしての福祉は反文明を目指している。物事を分別するのを嫌う。だから福祉の営みを特化するよりも、ライフスタイルの1つだとしてしまう。

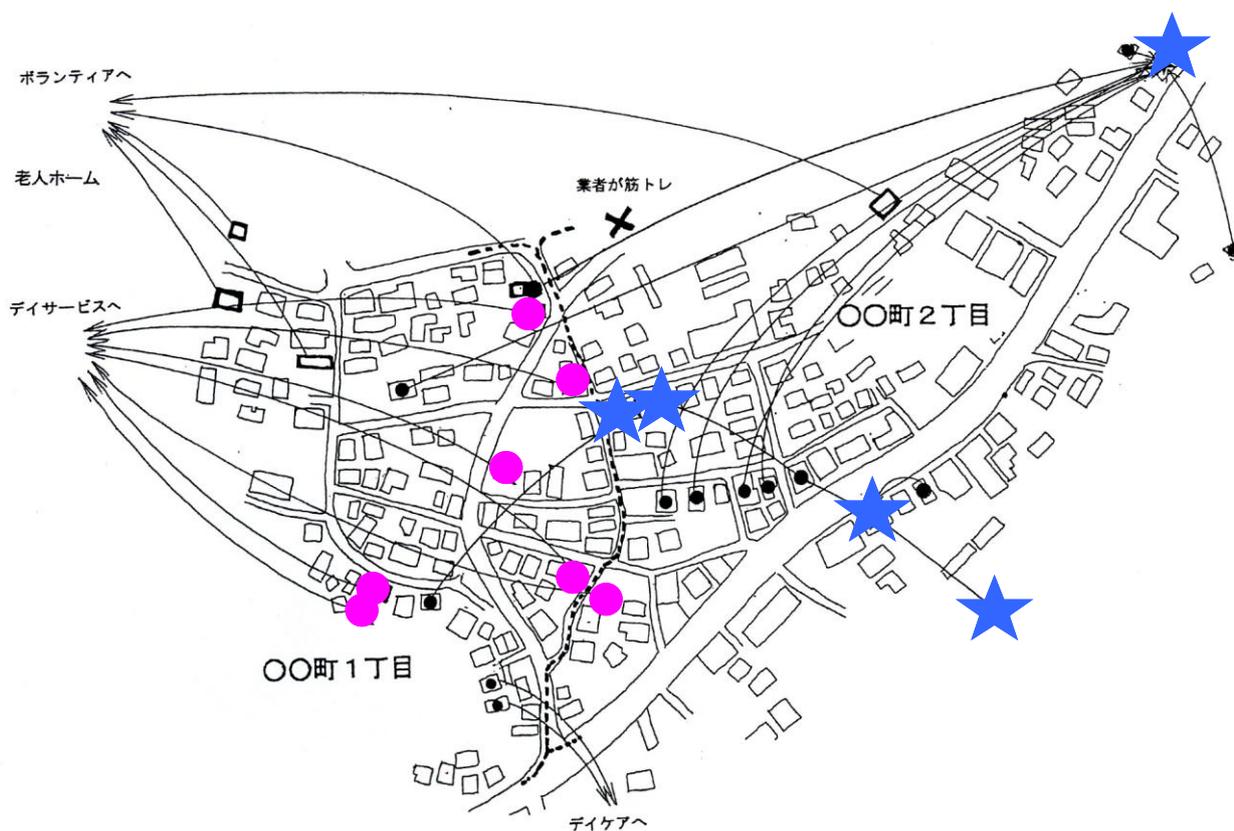
これだけすさまじい勢いで文明化が進められているのに、ライフスタイルとしての福祉を積極的に進めましようと言うだけでも、現実無視と言われそうである。

ライフスタイルとしての福祉を推し進めることは、今の文明の流れを思い切って変えていこうということである。生半可な心構えではとてもできない。

(13)日本人の大部分がライフスタイル型福祉になじんでいる

意外な話をするが、実は日本人の多くがすでにライフスタイル型福祉に馴染んでいるのだ。

次のマップは本論で取り上げてあるものだが、点線の左側が1丁目、右側が2丁目である。デイサービスを利用しているのはすべて1丁目の人。では右側の人にはデイサービスへ行かないで何をしているのか。ここは沖縄で、沖縄では井戸端会議を「ゆんたく」と言っているが、このゆんたくが右側にはたくさんできている。右端のゆんたくにはかなりの人が来ている。要するにこれが2丁目の人にとってはデイサービスなのだ。



そういえば、麻雀に来ている人は、麻雀が指のリハビリになると言っていた。公民館の合唱グループに加入している人が、喉頭癌の手術を受けた後のリハビリのために入ったと言っていた。

つまり日本人の多くはじつは、そういう場で福祉を受けていると見ていいのだ。いわゆる福祉サービス、つまりミエミエの福祉を受けている人の方が、むしろ少数派なのかもしれない。考え方によっては、もう一息でライフスタイル型が日本を制することができるのだ。

①文明としての福祉	①文化としての福祉
②集合としての人間へのサービスの1つ。 他の営みと区分けされた「福祉」というサービスに特化。	②複雑な願いや欲求を持つ存在としての人間に対する、ライフスタイルとしての福祉。サービスというより関わり合い。生活の中に紛れ込んだ福祉。
③めざすは効率、簡便、やり易さ、手っ取り早さ。	③めざすは当事者の尊厳の保持。1人ひとりをかけがえのない存在として扱う。
④推進者発・担い手発。担い手と受け手に区分け。担い手がやり易いサービス。	④当事者発。尊厳ある扱いは当事者にしか分らない。
⑤実践者は推進者・活動者。相手を集める。施設に收容。粗雑な福祉になってしまう。	⑤実践も当事者主導。並みより上のサービス。水面下に隠れたサービス。

〈注〉この件に関する本研究所の冊子は、以下のとおり。

- ①「ライフスタイルとしての福祉」
- ②「当事者発の福祉」
- ③『「安全を守る」から『尊厳を守る』へ』（最新刊・近日発行）
- ④「当事者がつくる福祉」（最新刊・近日発行）
- ⑤「尊厳福祉」の概要（本誌）

[今後明らかにすべき事柄]

以上が「尊厳福祉」の概要だとして、これらの考え方をどのように具体化していくべきかを検討しなければならない。

(1) ライフスタイルとしての福祉の具体化作業

- ①いま実践されていることを「ライフスタイル」に転換していくとどうなるのか。各種の福祉サービスや福祉事業・活動はそれぞれどういう姿に変わっていくのか。最終的には、いま存在する福祉の具体化としての施設やサービスのすべてが人間のライフスタイルの中に掻き消えていくはずなのだ。
- ②そうなると、社会はどのような姿になっていくのか。福祉が完全に人々の日常生活の中に解消されたとき、社会はどのような姿になるのか。目に見えて変わっていることがあるのか。
- ③その時「福祉」はどのような働きに変わっていくのか。おそらく今までよりもずっと福祉効果が上がっているはずである。それは具体的にはどういう面でか。
- ④ライフスタイルとしての福祉が発展していったとき、人々は企業やその他の地域グループでの普段の営みの中で福祉に関わっているだろうが、それは具体的にはどんな形で実践されているか。

(2) 福祉の働きはその時どのように変わっているだろうか

- ①概要の中で触れてあるように、福祉の働きは歴然と変わってくる。並みよりもはるかに高い福祉、水面下に隠れた福祉、つまり隠し味になった福祉、要援護者が担い手に逆転する福祉、要援護者の能力が劇的に発揮される福祉、担い手と受け手が自由自在に入れ替わる福祉とか。それらが極限にまで進めば、いったいどういう福祉ができあがるのか。
- ②担い手でなく、受け手に都合の良い福祉ができ上がるとして、実際にはそれはどのような姿になるのか。

(3) 当事者主導の福祉は具体的にはどんな姿をしているのか

- ①要援護状態にある当事者がどのようにして主役を演じることができるのか。
- ②しかも当事者自らの手で自分の福祉を実現しなければならないとしたら、それは具体的にはどうしたらいいのか。
- ③結局は当事者は人々の支援を得なければならないのだが、それをどのように可能にするのか。上手に助け

てもらうには、どういうテクニックが必要なのか。

④期待されるのは、私たちがみんな、当事者意識を持ち、当事者として行動するようになることであるが、しかし私たちはそれがなかなかできずにいる。当事者意識をどのように育てることができるのか。

⑤住民みんなが当事者の自覚を持った時、当事者への支援に本当に回るものなのか。

⑥当事者をサポートする人材が現れるだろうが、それはどういう人なのか。社会のどんな組織に所属しているのか。

⑦当事者の中から非常に優秀な人材が現れるはずだが、それはどういう人物で、どういう部門から出現するのか。

⑧その時、当事者グループはどのような状態になっているか。大きな発展を遂げているのか。

(4)国や自治体、福祉事業者はそれぞれどのように変わっていくか

①国のやり方は文明としてのそれである。自治体も同様。そのために福祉関係者全体が文明型福祉を実践している。国や自治体がライフスタイル化の流れに適応できるのか。その中のだれがライフスタイル化の先鞭を切れるのか。

②あるいは国も自治体もあくまで文明型福祉を続けようとするか。その時ライフスタイル化の流れとどのように闘っていくだろうか。表面的には、ライフスタイル型福祉を自分たちも追及していると公言するだろう。だから実際の行動をよく見て評価しなければならない。

③国や自治体がライフスタイル的福祉を取り入れる可能性はあるだろうか。何が変わると、そういう可能性が生まれてくるのか。

(5)ライフスタイル型福祉を日本社会に推進普及する機関は？

①ライフスタイル型福祉を理解して、これを日本社会に普及させる機関はどこか？

②そういう機能を持った専門機関や企業が今後生まれる可能性はあるか。

③一般住民の中から、この発想を全国に推進普及させる存在が生まれる可能性はあるか？

④日本に限らず、他国で、または国際機関で、こういう活動ができる組織が生まれる可能性は？

(6)ライフスタイル型と重ねて、反文明の運動は起きうるか？

- ①ライフスタイル型福祉とは、要するに反文明ということだ。この福祉の普及を反文明と連動して進める活動が生まれ得るか？
- ②今の文明のどこから、これを崩していくきっかけが生まれるだろうか。ライフスタイル型福祉はその先兵になり得ないだろうか。
- ③反文明とは関係なく、ライフスタイル型福祉だけで独自に発展できるだろうか。
- ④リハビリをスポーツジム等でやりたいという患者に、厚労省が医療機関と仲介して、病院のカルテをスポーツジムに提供するということがあった。このあり方が広がる可能性はあるのか。福祉機関は福祉のノウハウを提供し、住民組織がこれを実行するという分担方式である。